

オゾン層・紫外線の年のまとめ（2017年）の概要

【オゾン層の状況】

世界のオゾン層

・2017年の年平均オゾン全量は、北半球から赤道付近にかけて広い地域で少なく、南半球では多かった。特に南半球高緯度のオゾン全量は顕著に多かった。

本文 1~4 ページ参照

・世界全体のオゾン全量は、1980年代に大きく減少したが、1990年代後半以降は減少傾向が止まった。近年はわずかな増加がみられるが、最近5年間のオゾン全量は、オゾン層破壊現象が顕著に現れる以前の1970年代と比較すると、依然として少ない状態にある。

本文 15~16 ページ参照

南極オゾンホール

・2017年の南極オゾンホールの面積は、南極域上空の下部成層圏気温が高く推移したことにより、最近10年間の平均値より小さく推移し、最大面積は1,878万km²（南極大陸の約1.4倍）で1988年以来の小さな値となった。 本文 5 ページ参照

・2017年の南極オゾンホール発生時期（8~12月）における南極昭和基地上空のオゾン全量は、参照値（1994~2008年の平均値）に比べ、8月、9月、12月は多く、10月、11月は並となった。 本文 6 ページ参照

北半球高緯度のオゾン層

・2017年3月の北半球高緯度における月平均オゾン全量は、ロシアからアリューシャン列島にかけて少なくなったが、下部成層圏の気温の状況から、北半球高緯度のオゾン破壊は顕著なものではなかった。 本文 9~10 ページ参照

日本上空のオゾン層（札幌、つくば、那覇、南鳥島）

・2017年の日本の月平均オゾン全量は、参照値（1994~2008年の平均値）に比べ、札幌、つくば、南鳥島では1年を通して概ね並か多い、那覇では並か少ないで推移した。

本文 11 ページ参照

・国内のオゾン全量は、札幌とつくばにおいて、1980年代から1990年代半ばまで減少し、その後緩やかな増加傾向がみられる。那覇においては2000年以降、緩やかな増加傾向がみられる。 本文 25 ページ参照

【紫外線の状況】

国内の紫外線（札幌、つくば、那覇）

・2017年の国内の観測地点における紅斑紫外線量は、参照値（1994~2008年の平均値）に比べ、札幌では3月、5月に多く、つくばでは1月、5月、6月に多く、8月と10月は少なかった。また、那覇では、7月、8月に多く、特に8月はその月として観測開始（1991年）以来2番目に多い値となった。 本文 13 ページ参照

・国内の紅斑紫外線量年積算値は、札幌とつくばでは1990年初めの観測開始以降、有意に増加している。 本文 30 ページ参照

南極昭和基地の紫外線

・2017年の南極昭和基地における紅斑紫外線量は、9月と10月はその月として観測開始（1993年）以来3番目に少なく、また12月は2番目に少なかった。

本文 14 ページ参照